
遺物狩りのクロエ

某県民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遺物狩りのクロエ

【Nコード】

N0345Y

【作者名】

某県民

【あらすじ】

アーティファクト

古代遺物。その存在が一般に知られたのはいつのことだったか。当初はただのアンティーク：そう思われていたそれは国家を揺るがすほどの力を持っていた。破壊兵器古代遺物。それを回収する任務をおびた能力者、「遺物狩り」の物語。

感想、お気に入り、評価点などいただけるとうれしいです。よろしくお願いします

けだるい毎日

「行くよ…ってクロエ!!」

「ああ…」

運動場の真ん中に一組の男女がいた。二人はやく10メートルの距離をとって相対していた。青年と少女のふたりはどうやら同年代の生徒のようで周りにも似たような組み合わせの人間が多くいる。ここは国立魔法士官学校。国の軍隊、警察に所属するための登竜門の一つである教育機関である。今この学校の広大な敷地の一つである運動場で、魔法の実技訓練が行われていた。

「聞ってる？」

「ああ、聞ってる」

少女が大きな声で言う。青年はそれにこたえるが顔を上げようとはしない。ずっと地面を這うアリの行列を眺めている。時折その短い黒髪が風に揺れるが、それすらも気にかけていないようだ。その顔立ちはどこか幼さを感じさせるが、ありを見つめるその視線は鋭いものであった。そして少女はその返事に満足したのか一度息を吐く。今回の授業は相手の魔法攻撃を「避ける」授業であった。

「じゃあ改めていくよ!!」

「ああ」

すると少女の手の周りの空気が赤く変わる。それは徐々に手の中心に集い、一つの紅い玉を形作った。少女はその球を満足げに眺めると大きく振りかぶって―アリの行列に夢中の青年へ思い切り投げだした。それは10メートルの距離を瞬く間に詰めて青年へ迫る。本

来ならばそれを防ぐ…それがこの授業の趣旨だったのだが当然のことながらアリの行列に夢中の青年には気が付くことなどできるわけがなく――

「あつちいいいい!!」

その球の直撃を受けて火の海に沈むことになった。しかし青年はさつとその海から逃れると一息ついてから大声で言った。

「何すんだよ! 危ないだろうが!」

「そっちこそなんでいけないわけ!？」

駄々っ子のようにごねる青年の姿に少女は呆れながらも言い返す。

「準備の確認の声が聞こえなかったんだ…もっと大きな声で言ってくれ」

「さっき「ああ」って言ってたのはどこの誰よ!？」

「きつとあれだ…日に当てられて頭がダメになって幻聴でも聞いたんだよ。どんまい」

「私はきっちり普段から鍛錬しているし、水分補給もしっかりしているから大丈夫よ!!」

「あ、そういえば日ごろから全く鍛錬をしていない俺は頭が痛くなってきたなあ……」

「わざとらしすぎよ…やるならもっとうまくやりなさいな…」

そういつて息をつく。彼女の茶色のポニーテールがそれに合わせて揺れる。

「どっかの誰かさんに奇襲を受けて体中ホッカホカだからな…いつ熱中症で倒れても文句は言えないな、うん」

「あのねえ…こっちは真面目に授業も受けない、実技もしないあんたに気をかけてやってるの」

「それはありがたいな。けど今度にしてくれ。乗り気じゃない…」

そういつて青年は運動場から出る道へと足を向ける。

「何してるの、まだ授業中よ？」

「サボる」

「またそういつて…人の好意をむげにして!!」

少女は手を天へとかざす。すると先ほどよりもより大きな紅い玉が形成された。

「馬鹿野郎、朴念仁!!」

先ほど同じく大きく振りかぶって投げられた火球は青年にまたしても衝突すると思われたが―その前で突如として消滅した。

「これでいいか？」

初めからそこに赤などなかったかのように。何も残さずにそれは消えた。青年はひどくけだるそうにそういうと、校舎の中に引っ込んでしまった。

けだるい毎日（後書き）

第一話です。これからできるだけ早い更新を目指します。少しでも興味を持たれた方はお気に入り、評価点、感想などいただければうれしいです

この世界の魔法の概念、置かれている国の状況などは次回以降、順を追って記していきます。どうかお付き合いください

魔法と魔脈

国立魔法士官学校

リベニア王国が直轄運営する戦闘を行う魔法戦士を育成するための士官学校である。日々戦闘技術を学ぶための実技演習、より深い魔法の理解のために勉強を積む、この国一のエリート学校である。そしてこの学校の他校との特異点は「有事」の際に一人の「兵」として扱われるということだ。それほどまでにこの学校の生徒の実力は認められている…だが、それは年端もいかないう少年少女を戦場に送ることと同義であり、世間一般では意見が分かれる。しかしこの学校に入学する人間は「兵」として扱われること、国を守ることに誇りを持っていた。

「私たちが存在している世界には「魔脈」まみやくというものが存在している。それは土地ごとに様々な性質を見せる」

教壇の上で一人の男性が教鞭をとっている。肩幅がとても大きく、まるで岩のような強面、肉体であった。周りには40名ほどの生徒が取り囲み、熱心に講義に臨んでいた。彼らは雑談もせずに教師と自らのノートにのみ視線をそそぐ。

「私たちが扱う魔法はその魔脈から生まれるものを材料にしてふるわれているわけだが…それが何かわかるものはいるか？」

この教室では魔法の基礎についての復習授業が行われていた。そう

いって教師が生徒たちのほうへ振りかえる。その途中ですでに解答は生まれていた。

「魔脈」から生まれる「魔力」を材料にしています。魔力の種類には…」

その声の主は一人の男性生徒だった。きっちりと整えられた髪型と味気のない黒縁メガネをまとう彼は、その印象と同じく淡泊に言った。

「大変結構だ、イバル君。だが私はそこまでの解答を求めているぞ？」

「…申し訳ありません」

「ほかの生徒も気を付けるように…戦場でこのように己が戦績に欲を出すことが隊員全体の生死を左右することもあるからな」

鋭くにらまれ彼は委縮してしまう。それほどの迫力が教師にはあった。その一言に生徒たちは無言でうなづく。その中でイバルと呼ばれた少年は唇をかんでいた。教師はそれを目に留めたようだが何も言わずに講義を再開した。

「簡単に言って魔脈は大きな魔力の流れだ。それは地面の奥底を流れ、世界中に張り巡らされている。地面を通り抜ける時点で多くの力は分散されてしまうから我々の周りに存在する魔力など微々たるものになる。そしてその魔脈の分流を自らの力として振るうのが私たちの使う魔法だ。彼が言おうとしてくれたように「魔力」には7種類の力がある。火、風、水、土、光、闇、無の7属性だ。そしてこれは各魔脈の属性と対応しているのは言うまでもないが…私たちが所属しているリビニア王国はこのうち一つの魔脈の恩恵を多く受ける立地にある。それがなにかわかるものは？」

「風の魔脈です」

「その通り、優秀だなレイカ君。ほかの国の例を上げれば：現在、我が国と敵対しているレボルス帝国は火の魔脈の上に位置していることから火の魔法に特化しているな」

先生の問いかけにわずかに遅れてそういった少女は先ほどの実技演習でクロエとタッグを組んでいたポニーテールの生徒だった。

「諸君も昔から触れ合う機会も多からうがこの国は風の魔法がひときわ繁栄している。なぜならこの国が風の魔脈の真上に位置しているからだ。私生活にもそれはよく用いられているだろう。最近ならばそうだな：エレベーターという新しい機構もこの魔法を用いているな。どのように風の魔法が用いられているか知っているものはいるか？」

エレベーターとは地上のある地点からエレベーターの一部である筒に入り、真上へ移動する乗り物である。先生はもう一度同じようにあたりを見回す。しかしその問いかけに生徒たちは沈黙する。どうやらその原理を心得ていない生徒がほとんどのようだ。

「わからないのか？もし市内で戦闘になった際に使用できる原理かもしれないぞ？」

威厳にあふれたその声はどこか威圧感すら感じさせ、生徒たちはそれに気おされてしまい、自信のない答えを口に出すことができないようであった。その中で一人の青年の声が響く。

「一本のでかい筒を用意する。その内側の底面にちょうどぴったりはまる一回り小さい人が乗る筒を用意する」

「ほう…クロエか、珍しいじゃないか」

「あんたはなんだか圧迫感があるから早く帰ってほしいんだよ」
「安心しろ。これが答えられ次第に授業は終了する。続けろ」

声の主は教室の最後尾で突っ伏していたクロエだった。相変わらず机に突っ伏しながら彼は言う。

「んで、したから風の魔法で空気を入れてやる。ピストンのスケールをでかくした感じだろ。空気に押し出された人が乗る筒は徐々に押し上げられる。おりたいときは徐々に空気を抜いてやればいい」

「正解だ。クロエ」

「ということで授業終わり。じゃあな」

そういつてクロエは教室の外へ消えてしまった。それを見てイバルが声を上げる。

「先生質問があります。あのような態度は問題ではないでしょうか！？」

そこにはどこか怒気が含まれていた。確かに先ほど先生から「仲間を殺すかもしれない」と暗に言われてしまっているが故に、いらだっていたのかも知れない。

「クロエのことか？ああ、あいつはいいさ」

「なぜです！！」

この先生の発言には周りの人間も反応する。その意見は総じてイバルの意見に賛同するものであった。

「あとであいつにはたらふく罰を与えてやる。いままでずっと俺の授業を寝っぱなしで通してきたからな…覚悟しておけ」

その時の先生の凄味は普段にましてすさまじく、生徒たちは誰一人声を上げることができなかった。

「はあ、あいつ……やっぱ馬鹿……」

その中でレイカは大きく息を吐いた。

逃走劇・1

商店街。さまざまな喧騒が飛び交う、民衆の空間をクロエとポニーテールの少女、レイカが歩く。その周りからは様々な情報があふれだしていた。彼らはどうやら下校中のようだ。

「安いよ安いよ!! 今ならこの野菜が…」

「なんでも帝国のほうで…」

「ママ〴〵買ってよ〴〵」

八百屋のおじさんが声を張り上げる。その隣では職人服に身を包んだ青年二人が世間話を興じ、はたまたその隣ではお菓子屋さんが甘い香りを通りに流し、子供たちを魅了する。そしてそれはこのクロエという青年にも通用する誘惑であったようだ。

「うまそうだなあ…あのケーキ」

「毎度のことながら、下校中買い食い禁止だからね」

「…わかってるよ」

少年はお菓子屋さんを凝視しながら言う。その姿に彼の発言を信用させる要素はかけらも含まれていなかった。レイカもそう感じたようだった。

「それにしては涎の量がすごいんだけど」

「じゅるり」

「はあ…」

お菓子屋さんにフラフラと近寄るクロエをレイカが彼の制服の裾をつかんで止める。レイカは大きくため息をつく。

「大体クロエはなんでこう子供っぽいの？」

「失礼な。お前よりはより大人っぽい容姿をしているつもりだが？」

そういつてクロエはレイカの胸のあたりを見る。それを見てレイカはその小さな肩を震わせる。

「どこ見てるの！変態！」

「安心しろ。俺にそういう趣味はないから」

「そういう意味じゃなくて……ッ」

そういつて胸のあたりを腕で隠しながら恨めしそうに彼をにらむ。

「ん？俺が大人っぽくないってことか？確かに俺は線が細いから何とも言えんが…背は高い自信はあるぞ？」

そういつて上目で頭の上を見るようにしながら頭の頂点に手のひらをかざす。そして視線をレイカに戻した。

「こっ…の…わざといってるでしょ…」

「なにが？」

その挙動で少女が怒りに震えその感情を爆発させようとしたとき…異変は起こった。

「クロエは…貴様か？」

「ん？」

凄味のある男性の声。それは青年の真後ろから響いた。木造建築の家屋が多く並ぶごく一般的な街角の一角には似つかわしくないその

雰囲気クロエは振り返ろうとするが背後から新たに感じた感覚にそれをためらう。

「え…」

クロエの隣に控えるレイカが息をのむ。なぜならクロエは黒装束の人間に背後からナイフを突きつけられていたのだ。それを雰囲気から感じ取ったクロエは振り返ろうとする動きをキャンセルした。

「どなたでしょうか…？」

「聞いている。貴様の名前はクロエで正しいか？」

無機質に問うその声は人間性が皆無であった。

「抵抗するなよ？ 質問にだけ答えろ」

男はそういつてナイフを少し押し付ける。その様子にレイカは息のみ、クロエはその視線を鋭くする。しかし周りの通行人はなぜか誰一人としてその異常を認知していない。さらにクロエの命を盾に取られているためにレイカが周りに助けを求めることは不可能であった。

「魔法を使った…柄だけが実体…」

その中でクロエがつぶやく。それを怪訝に思った黒装束が言う。

「なに？」

「いや、独り言だよ…俺がクロエで正しい。何の用だよ？」

「ついてきてもらおう」

「俺じゃないとだめなのか？」

「君以外は持っていない異能が必要でな」

クロエはその返事を聞くと目をいっそうに鋭くした。

「なるほどね、クライアントはだれだ？」

「答えてやる必要はないな」

「そうだな：じゃあこっちもついていく理由がないわ」

「今の状況がわかっていいるのか？」

「ああ、それはもう：行くぞ、レイカ」

「え？：ええっ！！」

そして彼はその一言とともにレイカの手を引き走り出した。背後には突きつけられたナイフ。それはいつでも彼の背をさし穿つ準備は万端であった。

「馬鹿か：無傷でとらえよとの命令だったが：仕方ない」

黒装束がその手のナイフを少年の足に投擲しようと一瞬だけ身構える。しかしすぐに異変に気が付いた。

「あばよ！間抜けさん！！」

「くそっ！！」

黒装束の手に握られていたナイフ：その刀身が消滅し、柄のみになっていたのだ。

「魔法刀身」

金属などの物体の代わりに魔法で刀身を構築する技術で金属に比べ、小回りが利くことや、刃こぼれしないこと、さらには属性ごとに様々な恩恵を得られるとあってこの世界の刀剣武器はほとんどがこの形態をとる。しかしその刀身部分が使用者の意図しない間に消えて

しまっていた。

「…油断したな、さすがアナリアの魔眼か…」

黒装束がそのフードの中で口を歪める。黒装束が次の行動、すなわち二人との距離をつめ始めるころにはすでに両者の距離は大きく離れていた。平凡な夕方の商店街を舞台にした異様な魔法使い3人組の逃走劇が始まった。

逃走劇―2

「クロエ!!あれどうなってるの!!」

「俺に聞くな!俺もあんな黒子の知り合いはいない」

「じゃあなんで脅されてたのよ?」

「金借りてる奴にあんな奴はいないし:わからないって。けどあれはうちの国の人間じゃなさそうだぜ」

「金って:まあいいわ。そのあと、どういうこと?」

二人は商店街を人混みをかき分けながら走り抜ける。おそらくその後ろからはあの黒装束が迫っているのだろう。人混みの中からは徐々にこの異常な事態に気がついた人間が出始めている。

「さっきの魔法刀身:あれは火の属性だった」

「帝国の人間ってこと?」

「たぶんな」

レボニス帝国。火の魔脈の恩恵を多く受けるこの世界の覇権をつかんでいる国家。特にその軍事力は凄まじいものがあり、それを盾に高圧的で強気な外交を押し進めている。クロエたちが所属しているリベニア王国は元より王国の所有地であった風の魔脈の要所である「風の幽谷」の利権を巡り対立、現在は交戦状態にある。

「けどそれは早計じゃない?私だって風と火の魔法使えるし:」

事実、その系統に「特化」しているだけで他の術式の利用も可能である。

「それはあるが……!!」

クロエが思考を始めようとしたその瞬間：彼の「眼」が何かをとらえた。

「レイカ！5時の方向から火属性の魔法攻撃がくる、障壁展開頼む！！」

「え？あ、本当だ！！」

レイカがあわてて呪文を唱える。大地、大気に満ちる魔力を己が力としてふるう、そのための許可を世界に問う。

「風よ、逆巻け！」

その短い二言節。それに呼応して空気が異常な密を成す。商店街の一角を風が駆け抜け二人と黒装束の間に緑色の壁が展開される。それとまがまがしいほどの赤が到来するのはほぼ同時だった。

「喰らえ…炎よ！！」

二人に足で追いつくのは不可能と考えたのか。黒装束は人目をはばからずに破壊力を持った術式を行使していた。しかし彼の手元から現れた人の胴体ほどありそうな炎弾は緑の壁に柔らかに受け止められる。はじく、よりは取り込み受け流すようにその勢いをそいだ。しかしその炎弾の威力はすさまじく、相殺したにもかかわらず周りの家屋に熱から生まれた風が吹き付ける。

「うっそ…手加減なしってやつ？」

「そんなこと言ってる暇はないぞ…次！8時と6時の方向、同時に来るぞ！！」

「っ…いい加減にしなさいよ」

レイカがもう一度呪文を唱える。現れた一枚の壁はかろうじて二つの炎弾を食い止める。

「きつつ…クロエ！少しは協力しなさい！」

「してるだろうがよ。術式の察知…重要だぜ？」

「そうだけど…いつも私の魔法を打ち消す時のあれ、できないの？」

「…できないことはないけど…したくない」

「何で？」

「ダルい…」

「この場を切り抜け終えたら処刑ね」

「仕方ないだろう！？授業後に罰走とかいってあの頭堅いオッサンにしごかれたんだぞ！」

「自業自得っ！」

またしても迫っていた炎弾をレイカの風の壁が阻む。

「けどあの黒装束…このままじゃ埒があかない事くらいわからないのかしら」

「それな」

「当事者の割に軽い返答ね…」

「それな」

「…かっちーん。頭きた」

「悪い。俺なりに仕事をしててな」

そういうとクロエはレイカの腕を引きながら本通りから離れて路地裏に進んだ。

「ちょ…クロエ！急にどうしたの？」

「俺たちの進む先に時限式の火属性術式が待機されてた」

「本当？」

「本当」

クロエのその言葉と共に商店街の本通りから爆音がとどろいた。裏路地から空を見ると本通りの一角からもうもうと煙が上がっている。おそらくは火の魔法だろう。

「うっそ…」

「本当」

「じゃなくて！もしかしたら一般人が…」

「それは問題ない。なぜだかは知らないけどあそこには人一人いなかった」

「…黒装束も一応はそういうこと気にかけてるのね」

「ああ。しかし…なんだか臭いな」

「なによ？」

「いや…何でもない」

二人は裏路地を走る。表通りより人通りが少ないために逃走のスピードをあげた。しかしそれは黒装束にもいえることで両者の距離はいつこうに変わらないかに見えた。しかし一つの爆音がその並行を破壊する。

「爆ぜよ、その力、我が脚となれ！」

「まずいっ！！」

後方を追走していた黒装束の魔法行使。彼の足元の石畳が小さな爆発で吹き飛ぶ。そしてそれを見届ける頃には…黒装束はクロエの眼前に迫っていた。

「つう…」

「クロエ！！」

「流石、魔眼か…」

「照れるなあ…もう！」

そして振り下ろされる凶刃。先ほどの魔法刀身のナイフで振るわれたそれをクロエはそれを間一髪で避ける。彼の黒髪の手が宙を舞う。しかしクロエはすぐに反撃に転じる。己のこぶしを黒装束の腹に向けて繰り出す。

「はあっ！！」

ナイフを振りぬいた後の黒装束は隙だらけ…ゆえにそのカウンターは必中の必殺足りえるはずだった。その事実を黒装束はもちろん認識しているはずだ。しかし彼のありようはいまだに優位に立つ人間のそれであった。クロエはそれに違和感を抱く。そしてそれは彼が一步踏み込んだ時点で確証に変わった。

「ッ…！！」

「さすがに気が付いたか…残念だな」

黒装束はその衣服の内側に金属製の鎧を着こんでいたのだ。クロエはその動作をキャンセルして一步距離を置く。

「いまだき金属製の鎧なんて珍しいな…あのまま殴っていたら手が…痛そう…」

「貴様がアナリアの魔眼など厄介なものを抱えていなければまず着ることはないだろうがな」

鎧。それは今日この世界では魔法鎧を指す。名の通り魔法によって構成されている鎧である。その強度はその魔法使いの熟練度に左右される。金属製の鎧との明確な差別点は魔法刀身と同様に各属性に

よる長所があることであろう。そしてその鎧には重さが無い…それが金属製鎧の衰退の理由の一つだ。

「さすがにこれから引き離すのはムリくさいな…」

「クロエ!!」

「レイカ、いきなりですまないが帰っていいぞ…」

「え?」

「すこし派手にやる…離れてろ」

クロエが普段からは似つかない声色で言う。その様子にレイカは少しだけ押されてしまう。

「何言ってるの!! あんたふだん私にも勝て……」

クロエの後ろで彼を見守っていたレイカが地面に崩れ落ちる。彼女は最後までクロエの瞳を凝視していた。

「そんなことまでできるのか…魔眼というのは」

「まあ心を許した相手にしか通用しないけどな…なんとも皮肉だろう?」

「貴様にはお似合いだ」

「そりゃどうも…」

クロエはそういつて構える。まるでそれは刀剣を持っているかのような…正眼の構え。しかしもちろん彼の手にはそんなものはない。ましては魔法刀身を形成できるような柄もない。

「なにをしに来たか知らないが…俺の日常から消えてくれ」

「無理な相談だな、魔眼」

クロエに答えて黒装束も構えをとる。しかし彼の手に魔法でかたどられた刀剣はない。先ほどの魔法刀身も捨ててしまったようだ。代わりにそこにあったのは金属製の太剣であった。

「さすがに学びもする…行くぞっ!!」

「どうぞご自由に…やることは何も変わらない」

黒装束がクロエに対して魔法を揮う。それを見るクロエの眼はどこまでも澄んだ黄金色に輝いていた。

逃走劇－2（後書き）

アナリアの魔眼についての詳しい説明は次回です。

アナリアの魔眼

飛来する炎弾。それをクロエは注視したのちにつぶやく。

「魔法式解析：分解」

その一言。それだけでその術式は消えていく。それは驚くべき事態である。そもそも魔法とは魔脈から提供される大きな力である魔力をもとに形成されている。そして魔法使いはその仕様の権利をあらかじめ魔法の詠唱の時点で得ている。その契約に他者が介入して打ち消すなど：本来はあり得ない所業である。

「さすがはアナリアの魔眼：魔法を打ち消す魔眼か：」

「魔眼」

それは魔法的な加護を受けた目のことである。その性質は多岐にわたり、力の大小も大きく異なる。その発生原因は先天性であることが多く、発現についての規則性も見出されていない。しかしその発言にはある程度「魔脈」、「魔力」あるのではないか：といわれている。そしてこのクロエという少年が持つ魔眼－アナリアの魔眼は魔法を打ち消すことができるようだ。

炎弾を牽制に胴を薙ぐべく振るわれる大剣の一撃。金属ならではの重みをもったそれはクロエがいたはずの空間を素通りする。

「体術もそれなりか？」

「たしなむ程度だ：」

しかしそれで攻撃の手を緩めるような黒装束ではない。さらにもう

一歩一しかし徒手のクロエには反撃を許さないっ間合いまで踏み込む。そしてもう一度振るわれる大剣。

「よっと!!」

それをクロエは軽く身を引いてかわす。そのすべてが紙一重。常に相手の間合いのギリギリに位置をとるクロエの立ち回りはどこか挑発的であった。硬直。クロエが黒装束の間合いに入ることではなく、黒装束もそれ以上の侵入をしない。そこに生まれた戦線の停滞。しかしそのような馴れ合いのような死合を続けている時間はそう長くはなかった。

「爆ぜよ!!」

黒装束の腹の底から響き渡ったその喝は、彼の周りの世界を揺らす。それは彼自身の鼓舞的な意味合いとともに一つの魔術を紡ぎだす。すなわちそれは火の魔法による爆発を自らの推進力に返ることで相手との間合いを一気に詰める一つの魔法の形、「炎脚^{えんぎゃ}」であった。それは先ほどクロエとレイカが黒装束に追いつかれてしまう要因になった術式である。そして今それは、黒装束に莫大な方向性を与え、クロエに向ける凶刃をさらに加速させていた。

「はぁあっ!!」

高速の突進から繰り出されるその斬撃は突き。それは切る行為ではない。切る行為は「面」をかたどる攻撃であるのに対して、「突き」は一点を貫く攻撃だ。ゆえにそれを防御しようとしたときに捌く方法が限られる。ましてやクロエは徒手空拳…その激流のような突きを捌ける要素は魔法しかなかった。

「風よ!!…!」

それもすでに遅い。二言説の詠唱ですら間に合わない。そもそもこの突進に対してそのような小細工が通用するのだろうか。そして、すでにその剣先はクロエの目前に迫っていた。

「もらった!!」

黒装束が勝利の確信に声を上げる。すでにその大剣はクロエの胴に深々と突き刺さり…

「あんた…俺のことどこまで知ってる？」

しかしそこにそのような悲惨な絵は何一つ広がっていなかった。代わりにそこにいたのは、赤い長剣を握るクロエの姿と…剣を握っていた腕を断ち切られた黒装束の姿だった。彼はその突進の勢いのままに地面に突っ込んでいった。そしてそれに遅れて宙から彼の持ち物であった金属製の太剣、そして燃え尽きようとしている腕がばらばらに「溶けて」落ちてきた。

「…なぜ…それは…火の魔法じゃないか…」

黒装束は片腕を落とされながらも反射的に距離を取っていた。しかしその表情には焦りが生まれている。そして彼はクロエの握る長剣にくぎ付けであった。無理もない。その長剣は魔法で刀身を構成された火の魔剣であったのだ。その刀身はまるで熱く煮えたぎる熱流のように柄から流れ出していた。

「なぜって…」

「聞いていないぞ!! 報告ではお前は「魔法」は一切使えない、ア

ナリアの魔眼は魔法を打ち消す魔眼だと…」

「使いたくはなかったんだが間に合わないそうだったし…あ、なんとなく見えてきたな…あんた騙されたんだよ」

「なに？」

男の表情がみるみる青ざめていく。

「金属製の鎧…確かに魔法を打ち消す魔眼、しかも魔法が使えない相手となればそれはひどく有効な手だっただろうな」

「…なにが知りたい？」

「アナリアの魔眼…こいつは打ち消すだけの魔眼じゃないんだよ」

クロエはそういいながら自らの黄金色の眼を指さす。

「…どういうことだ」

「物わかりが悪いな…わかったよ、見せてやる」

そういつてクロエはその長剣を掲げる。そしてそれに呼応するようにしてその刀身が元の太さの数倍にまで爆発的に膨れ上がる。まるでそれは火山を伝う溶岩流のような無慈悲さを持っていた。その様子をみて黒装束は驚愕に顔をゆがめる。

「…まさか…火喰^{フランザエルジュ}らいの魔剣…？」

「正解だ、ついでに最後に教えてやる。アナリアの魔眼…こいつは相手の魔法を解析して、そのまま写し取る…いや俺なりに完成させちまう、くそつたれな魔眼だ」

振り下ろされる爆炎。その赤は裏路地を被いつくし、黒装束を飲み込んだ。

アナリアの魔眼（後書き）

次回でひと段落です。よろしくお願いします

暗躍

先ほどのクロエと黒装束の戦闘の舞台となった商店街の裏路地。そこを三人の足音がこだまする。

「流石、魔眼といったところでしょうか…」

「そうだね。あの年であれだけの魔法行使ができるのはやはり魔眼のおかげなのかな？ミケル」

フランヴェルジュ

「わかりませんね。火喰らいの魔剣ですよ…あ、帝国の皇帝の側近のクラリスさんでしたっけ？あの人がその名手だったはずですよ？」

「あ、そういえばそうだったね…忘れていたよ」

まるで先ほどの戦闘をその眼で見ていたかのような物言いの三名は、裏路地の一角…全身を鎧姿に固められた人間が倒れ伏しているのを目撃する。彼がもとより身にまとっていた黒のマントはすべて焼け消えていた。その周りの地面はあまりの高温にさらされたからか、かぎなれない香ばしい臭いを発している。そのうちの一人…まだ幼さの残る顔立ちをした、法衣を着た少女が言う。彼女の手には体の大きさには不釣り合いなほどに長い杖が握られていた。

「あちゃあ…これはひどいですね」

そこに転がっていた元黒装束の有様を見ていったのだろうか。いや、それは違う。

「まだ息がありますか…」

「そのようだね」

その少女の隣に控えていた長身の男性が言う。彼は体を黒の生地に金色の装飾が施された胴着のような服に身を包んでいた。彼の黒い目はまったく瞬きもせず、そこに転がっている元黒装束の姿を注視していた。

「あれほどの魔法の一撃を受けてなお無傷……ありえないですよ、本来」

ミケルと呼ばれていた少女がいう。そして彼女の言うとおり、この男はマントは焼き払われたものの、その体、そして身に着けていた鎧はあの魔術による外傷をまったく受けていなかったのだ。金属製の鎧の表面、魔法の高温にさらされたであろうそれもまったく変質せず、もとのままに彼を守っていた。それが彼女の言う「ひどい」状況であつた。

「気持ちが悪いくほどの防御性能……これは本当に人間が作ったものなのですか？」

「さあ？それは僕が知りえるところではないね」

二人の間に立つ、白髪の美しい青年が言う。その長めに切りそろえられたそれは、どこか女性的な美しさすら感じさせ、彼の纏う、きらびやかな装飾に彩られた服装も相まって大きな存在感を示していた。

「さすが……古代遺物アーティファクトですね」

「いや、違うよスパード。それはまだ早い認識だ。これの力はそんなものじゃない」

「といたしますと？」

そういつて白髪の青年は倒れ伏す元黒装束のもとに近寄る。それを

咎めようとしたのだろうか、スパイダが一步近寄るがミケルにそれを制された。

「みてごらん？この男」

青年は鎧の男の顔を足で持ち上げる。その行為はひどく品がなかったが、それを二人がとがめることはなかった。そしてそれを見て二人は息をのむ。そこには男の顔面にびっしりと書き込まれた式があった。それはまるで生気を吸い取ろうと必死に絡みつく蛇のようであった。そしてみるみるその顔は生気を失い、干からびていく。

「これは…」

「たぶん古代神聖文字…ですよね」

「そうだろうね。すごいだろう？これ」

すといん一軽い音を立てて男の頭が地に落ちる。それは青年が足を外したから…ではない。自発的に首がねじきれておちたのだ。その頭を支えていた青年はそれを冷めた目で見ると二人のもとへ足取りを進める。

「ふふ、足りない出力を使用者の生気で補ったのか…まだわからないことだらけだね、ミケル」

「はい、けどなかなか楽しそうです!!」

「研究熱心なのは構わんが…」

「スパイダ。君は古代遺物の回収をお願いするよ。その彼も一応回収をお願い。いい研究材料になるかもしれない。これから忙しくなるよ」

「承知しました」

「さてと…僕のほうでも働くかなあ」

青年は大きく伸びをする。

「陛下はいずこへ？」

「僕は帝国とのいざこざを少し調整してくるよ。そうだスパード。彼が通う学校、士官学校にも連絡しておいてくれよ。そろそろ忙しくなるって」

「といますと…ついに再戦ですか？」

「ああ、再戦…というよりは僕たちの「兵器」の試し打ちに彼らに付き合ってもらうだけだよ」

「……………陛下。アーティファクト古代遺物は！！」

先ほども無表情を通していたスパードが唐突にその態度を変える。しかしそれも青年によって制されてしまう。つかの間の豹変を見せたスパードであったが、あくまで青年よりは下手に出るようですぐに元のようにふるまう。

「スパード、君の言いたいこともよくわかるよ。けどね、僕らがこの世界に生き残るにはそれしかないんだよ。帝国に隣接してしまった僕たちの運命かもね」

「…承知しました」

「いつも無理を言ってすまないね」

「滅相ありません。私はなにも問題はありませんが…しかし…あの少年には…」

「僕だって本来こんなやり方は好かないさ。けど…君のその懸念のためにも、彼、アナリアの魔眼には頑張ってもらわないとね。どうやらまだ「ここ」までは見えていないようだし」

そういつてその青年一リベニア王国、国王…キレイはその場を後にした。

暗躍（後書き）

思ったよりかけるものですね…これの次の文章でこのお話の小さな区切りとなります。前言と食い違ってしまったって申し訳ないです。そこから徐々に盛り上がっていききたいですね。よろしくお願いします。

魔眼の視た違和感

「はあはあはあ…」

商店街。そのはずれを一人の少年がかけていた。その姿はレイカを抱えたクロエのものであった。

「なんなんだ…あれ…」

彼はレイカを抱えているにもかかわらずほぼ全速力といっても過言ではないほどの速度で走っていた。もちろん彼は誰かから逃げているわけではない。彼を追いかける黒装束は先ほど失神した。しかし…

「なにも視えなかったぞ…」

彼は盲目の人間ではない。彼が言う「視えない」…それは魔眼による魔法解析についてであった。

「あれだけの魔法を…金属製の鎧だけで防いだ？ありえない」

彼はまず驚愕した。己が揮った相手の魔法刀身術式の一つの完成形フランクエルジュ一火喰らいの魔剣。それはまず間違はなく黒装束に直撃した。それにもかかわらず彼はクロエに向かってなおその姿勢を変えずに地に立っていたのである。

「魔法…じゃないのか？」

ゆえにクロエは魔法を使って防がれたと判断した。それひとつとっても彼には多大な衝撃だった。そこで、魔眼の一つの力…解析能力

でもってその障壁を解析し、魔法を打消し、追撃を加えようとしたのだが：

「なにも視えなかった…」

そこに普段見慣れたような魔法の情報は一切存在せず、代わりにそこにあったのは黒装束を包む黒くぼやけた空間。彼の今まで認知してきた世界に存在していなかった一つの新たな要素。そしてそれを直視した時に聞こえたあの声――

「モット オクマデ ミテミナイ？」

クロエの奥底から響き渡ってきたその声に彼は戦慄し、反射的にその場を離れてしまったのだ。視界の端で黒装束が倒れたことを確認したがそれすらも彼は怠りかけた。彼も士官学校の生徒である。その程度の恐怖で本来すくむような人間ではない。事実、先ほど黒装束との戦闘をこなしているのだからその精神の強度は折り紙つきだ。だがその声は彼を根底から揺さぶってしまうほどの嫌悪感を持っていた。

「わけわからねえよ……」

「んう……」

するとその腕の中でレイカが目を覚ます。

「大丈夫か？」

「う、うん…あれ？ここは？」

クロエは足をとめながら言う。そこは市内を横切る河川の防波堤に沿った河川敷だった。石積で作られた防波堤は一種の芸術性すら感

じさせる。

「今はさっきの野郎をまいて安全域まで避難したところだよ」

「助けてくれたの？」

「まあそうなるな」

彼はそっけなく言う。しかしレイカには違うように聞こえたようであった。その表情をわずかに明るくしたがすぐに次の疑問を投げかけた。

「そうなの？…あれ、私はなんで失神を？」

「あいつにでかいのぶちかましてその時に気を失ったんだよ。まああの時は正直大分焦ったが…あのおかげで逃げ切れたよ、ありがとう」

「そ…そうなの？よかった…脚でも引っ張ったのかと思って…あ、感謝しなさい！！」

「はいはい」

クロエは自らの魔眼…それと戦闘の経過などについてはあえて伏せた。そしてクロエは歩き出そうとするが…

「あっ、なんでお姫様抱っこなのよ！」

急にレイカが騒ぎ出す。クロエはそれを抑え込むように少し強めにレイカを抱き上げる。

「いやだったか？」

「いや別に…ッ、じゃなくて！！なんでさらに力強くしてるのよっ…」

「いや…おちそうだったから」

「もう気絶は脱したんだからいいのよ。抱っこしてなくて！」
「あ、そっか」

クロエは唐突に手を放す。当然今まで抱き上げられていたレイカはそこから落下運動をはじめ――

「ちょー！何すんのよー！」

河川敷の草に覆われた坂道を転がり、そのふもとまで落ちていった。

「もういいっていうから」

「あんた…少し時と場合をわきまえなさい」

「…すいません」

クロエは坂道を滑るように下り、レイカの隣までやってきた。その表情に先ほどのまでの憂いは存在していなかった。

「帰り道に通ったお菓子屋さんでケーキおごりで勘弁してあげる」

「帰り道は買い食い禁止だろ？」

「こんど休日に付き合いなさいな。そんぐらいは甘んじて受けなさい」

「…はいはい」

夕暮れが川沿いの彼らを照らす。静かな水面に移るレイカの表情はどこか朱がさしていたが、それはきつと夕暮れの陽光のせいであろう。

王城への招待

風にカーテンがなびき、その隙間から僅かに陽光が射し込んでいる。その光に照らされる一つの机、そこで年季の入った革でなめされた表紙の分厚い本をめくる一人の少年がいた。

「やっぱりわからないもんだな…」

少年は自らの短い黒髪を指でいじりながら呟く。彼はここ国立魔法士官学校の図書室にいた。その中で彼は数多くの蔵書の中から一つの記録書を選び、ゆっくりとページをめくっていく。その表紙には「アナリアの魔眼」とだけ記されていた。

「魔法式の解析・視覚化、魔法式の打ち消し、魔法式の再構成…」

それが彼の持つアナリアの魔眼の能力である…とこの書物には記されていた。だがアナリアの魔眼の持ち主であるこの少年…クロエの求めている資料はこれではなかったようだ。彼は重そうに古本を抱えると本棚へと向かう。

「魔法式の視覚化…っと」

台車を持ち出して本棚へ本を戻し、そのまま高い部分を探しているようであった。「魔法式の視覚化」それは名の通り相手がふるった魔法の内訳を視覚的に把握する技術である。その内訳を示すものこそが魔法式である。これは世界に存在する魔力を扱うことの許可を得るための申請である。どのように扱うのかもそこに記されているがゆえに、魔法式を把握することによって相手の魔法に対する適切な対処法、さらには弱点まで看破することが可能になるのだ。しか

しこの技術自体がかなりの魔法の素養を必要とするために扱う人間は数えるほどしか存在しない。この能力が内包されているアナリアの魔眼の持ち主であるこの少年はその数少ない技術の行使者だ。

「あ、あった」

クロエはそういつて本棚から本を引き抜く。それも先ほどの資料と比べても遜色ない程の分厚さであった。彼は机に再び向き直る。

「魔法式の視覚化をした上でなお見えない魔法は…」

そして本をめくる。彼はどうやら「魔法式の視覚化」の穴を探しているようであったが…

「やっぱ今のところ発見されてないか」

どうやら見つからなかったようで、彼は軽くため息をつく。

「なんだったんだ…あれ。魔法じゃないのか、やっぱり。いや…ないだろ、それは」

彼は愚痴のようにこぼす。彼がいう「あれ」とは先日の黒装束が着込んでいた鎧のことであった。あの異常なまでの守護性をもっていた鎧…そして異常なまでの嫌悪感を放っていたその理由を彼は探していた。あの鎧には魔法的な加護が与えられていたのかもしれない。彼はそう判断していつも通りに解析に入った。しかしそこに見えたのは魔法式などではなく、気色の悪い黒だけであった。

「あの様子に該当する魔法があれば…なんて都合がよすぎるか…」

それに大きな違和感、そして恐怖を感じた彼はあの鎧の正体を探しているようであった。そしてその一つの結論が：

「やっぱ魔法じゃないのか？」

彼は虚空に問う。それにこたえるものは存在しない。彼にもそれは分かっていたし、当てになどしていない。しかし認めたくなかったのだろう。自らの知りえない異物が自らの日常に浸食を始めていたことを。内心彼は確信しているはずだ：「あれは魔法ではない」と。彼はまた大きなため息をつきながら机に倒れ伏す。するとそこに一人の男が現れた。彼は黒いゆとりのある服に身を包み、クロエに向かって歩いてきていた。歩きたびに揺れる服が、彼の存在感を後押しする。

「クロエ、自主勉強か？めずらしいな」

「……おっさんか」

クロエが顔も上げずに言う。しかし男はその態度を咎めはしなかった。代わりに彼はクロエの隣のいすに腰掛ける。大きな体の彼が座る椅子はとても小さく見えた。

「どれどれ：魔法式の視覚化か。何をいまさらこんなもんを？」

「：俺が授業サボっているのはいいのかよ？」

「そんなことはどうでもいいわ。それよりもお前が机に向かってるのが恐ろしい」

「：教師の言うことかそれ」

「それもそうだな。ならば今からつまみあげて教師の前まで引きずり出してやろうか？」

「遠慮しておく。あんたもサボりか？」

「そんなわけはないだろう。私は「授業中」は至って真面目な先生

だろう？」

「…本当にな。こないだも無駄に走らせやがって」

「はっはっは」

男が快活に笑う。その態度は図書室の静かな雰囲気には対を成すもので：

「静かにしてください」

「おう、すまんすまん」

彼は図書室の司書の女性に注意された。一度女性に向けた体をクロエへ戻す。

「それでどうした？こんなもん」

「…少し考え事しててな。おっさん、たとえばなしだ」

「うん？いいだろう」

男は腕を組む。彼の小さな拳動のたびに彼の大きな体に椅子が悲鳴を上げる。

「もし、だ。俺の魔眼で解析できず…ましてや術式の完成なんて望めないような魔法…あるか？」

「ないな」

即答であった。しかしその表情はそこか険しいものに変わっていた。しかし机に突っ伏し続けるクロエはそれに気が付かない。

「それはない。お前の眼で読めない魔法はない、その本にも書いてあっただろう」

「やっぱそうか…よし、次だ。もし、そういう「何か」が存在した

とするぞ。それはなんだと思う？」

「…あるのか？そんなもの」

「仮定を覆さないでくれよ」

「……私は知らない」

「おっさん？」

突如として男の声のトーンが下がる。クロエもそれには気が付いたように体を起こす。

「だが、彼ならお前の問いに答えてくれるかもしれないな」

「彼？　というかおっさん、どうした」

授業中以外には見せないあまりにも真剣な態度にクロエは驚いているようだった。そして男はその口から予想外の一言を紡ぐ。

「クロエ…お前に召喚命令が出ている」

「召喚？　召喚術は俺には行使できないぞ？　アナリアの魔眼は…」

「違う、その召喚ではない」

「じゃあなんだよ？」

「リベニア王国王、キレイ様から直々に王城への召喚命令が出ているんだ」

「へえ…」

それをクロエは軽々と受け取って…その場から逃げだそうと腰を上げる。それを男がその太い腕で強引に食い止める

「やだ！　行きたくない。礼儀とかそういうのムリッ」

「そこなのか…お前は…」

男の腕の中でクロエは暴れ続ける。しかし次の一言でその態度を豹

変させた。

「詳しくは知らないが、「先日は失礼した」…だそうだ」
「なんだって？」

「その無礼を詫びたい…とかなんとか」
「…わかった」

クロエは動きをおさめる。彼は男の腕から離れると広げていた本をかたづけ始める。それをしながら彼は物思いにふけっているようで、その目つきは鋭かった。

「行くのか、クロエ」

「ああ…どうにも「におい」のもとがわかりそうな気がする」

「そうか。何があったかは知らんが…気をつけろよ。最近の陛下はすこしおかしい」

「噂ではよく聞くさ。なんでもやたら強気に帝国と渡り合ってるらしいじゃないか」

「ああ。風の幽谷の利権闘争も最近は進展を見せてきている」

「…戦争ってことか？」

「そうなるな」

「ったく…気が重いね。そんな御仁とこれから会うことになるわけか」

クロエは机の上の私物をまとめて図書室から出る道へ足を乗せる。その背中に男からの優しいげな、そして厳格な声が響く。

「お前の「魔眼」目当てかもしれん…もし…」

「大丈夫だ、おっさん。きにすんな。もしそうなら逃げ出してくるさ」

「気をつけろよ」

「……気持ち悪いなったく。なんでそこまでしおらしいんだよ。じゃあな」

クロエは背中を見せたまま軽く手を振る。

「さてと……弁解の後に、落とし前つけてもらおうかな?」

クロエはその両眼を黄金色に染め上げ、ゆっくりと王城への一步を踏み出した。

王城への招待（後書き）

こんにちわ。すこし書き方を変えてみました（？）どうでしょうか。
これからよろしくお願いします。

伝説のひきこもり

リベニア王国王城―

首都であるリンドルという都市の中心にそびえる広大な敷地を持った城である。黒味が強い石を積み上げられ作られたその城はその都市でひととき大きな存在感を放っている。この厳格な雰囲気醸し出す施設には国を統治する王が住んでおり、それを補佐する国の役所もこの施設の中に含まれている。この国第一の行政区画だ。またこの都市の主要な街道はすべてこの城の正面にある「王城広場」に集約しており、人通りも非常に多い、活気のある場所である。まさにこの国の心臓部分である。その王城広場に一人の少年…クロエが立っていた。彼は学校からそのままに足を向けたのだろう、制服のままであつた。

「いつ来てもにぎやかだね…ここは」

彼の周りには商人や住人の他愛もない会話が飛び交う。彼の周りを少女が風船を持って走り抜けていったかと思うと、その逆から馬車がかけてくる。蹄が石畳を打つ音、人々の足音、会話が混ざり合い、独特の空間を生み出している。その間をすりりと抜けながら彼は王城を目指す。

「あっ！」

しばらく進んでいると彼は一人の少女がぶつかってしまった。どうん―軽い音がして、相手が地面にしりもちをつく。

「いっつう…」

「大丈夫？」

クロエは相手がただの少女だと確認すると一步近寄って手を差し出した。彼女はしりもちをついた時に痛めてしまったのだろうか、腰のあたりをさすっている。その女の子はとても背丈が小さく、白い法衣を身にまとっていた。その幼顔にたいして彼女が使用している大きなメガネが不相応の知的さを醸し出していた。

「はい…すみません。前方不注意でした」

「いや、ごめんね。こっちも周りをよく見ていなかったよ」

彼がなれない喧騒に惑わされていたから…などということはもちろんなく、物思いにふけていたのだろう。これから会う男との会話について。彼はこの事態が尋常ならざることであることは理解していた。そもそも士官学校の一般生徒のクロエをわざわざ召喚する…それがすでにイレギュラーであった。

「ありがとうございます」

そういつて彼女はずれていたメガネをなおすとクロエの手を取る。彼女は立ち上がるために足に力を入れる。クロエは引っぱり上げるために腕を引く―すると彼の目前に彼女の幼顔があった。

「へ？」

クロエは状況を理解できていないようで困惑している。周りの人間も青年と幼い少女が至近距離で顔を突き合わせているこの絵をみて、何かしらの違和感を抱き始めているようだ。さらに少女はクロエの頬に手を添える。

「あの…どうしたんですか？」

あまりのパニック状態に彼はなぜ敬語になっていた。その間も少女の眼鏡越しの視線は彼の両眼をとらえて離さない。その目つきはやはりメガネに助長されてか、この少女のものとはとても思えないほどに鋭かった。

「…ふふふ、綺麗ですね」

「えっと…目のこと？ありがとうございます…」

彼は自らの黄金色の眼を指している。確かに彼の眼は一般的なそれではない。しかもどうやら魔眼を使用中のままにここまで来てしまったようだ。クロエには物思いにふけた際に魔眼が自発的に発動してしまう癖があった。しかしそれをこの少女に行っても理解できないだろう。彼はそう判断し口を開こうとして…

「アナリアの魔眼…本当にきれい…」

「っっ！」

その一言。それだけでこの少女が見た目通りに無害な存在でないことが確定した。魔眼の話は魔法にある程度通じているもの出なければ知りえない。さらにクロエの眼がアナリアの魔眼だと判断するには初対面の少女には情報が少なすぎるはずだった。

「君…何者？」

クロエは一步大きく引いて問う。その目つきを鋭くした、黄金色の魔眼に見つめられてもなお、少女の態度は変わらない。

「申し遅れたね。私はリベニア王国魔法研究所所長…ミケルという

んだ。どうぞよろしく」

喧騒の中、想像外の答えがクロエに向かってきた。

「ミケル：あの伝説のひきこもりか」

「引きこもりって：まあ基本的に陛下とスパードとしか会わないからそうなるかも」

ミケル：それはこの国の魔法技術を支える天才的な頭脳を持った創作者だといわれている。リベニア王国で扱われる様々な武器、防具、魔法式その原点は一人の技術者が作り出した。それがミケルであり、この国一の技術者の名である。しかし、交流をできる限り控えているらしく、その容姿、年齢、性別すべてが公開されていない。もはや死んでいるのでは？とすら言われているが、「ミケルの発明品」は今日でも多く王国へ提供されていることからそれは否定されている。ゆえに巷では姿が見えないミケルを「伝説のひきこもり」と呼称しているのだ。そしてそのミケルを名乗る少女がクロエの目の前にいた。

「にわかに信じがたいよな…」

「まあそうだね。仕方ない仕方ない」

そういいながらミケルはくるくると回る。

「それで私がここに来た理由を言わないと」

「ああ、やっと調子戻ってきた：んでどうすんだよ」

クロエは頭をかきながら言う。

「私は陛下のお使いでここまで来たの」

「だろうな。あんたが発明品を世に送り出すときは常に王国の専売だ。そこらへんは王様にやってもらってんだろ」

「なんか急に感じ悪いね…君。まあいいや。そうだよ、引きこもりである私の唯一の接点だったわけ」

「ミケルの発明品」そのほとんどは国の技術として扱われ、使用料を国内外から徴収している。それによって提供される莫大な資金はこの国の根幹に大きく根ざしている。

「汚いな…それでパシリ引きこもり天才少女はこれからどうするんだ？」

「少女って、こら！一応少女な年なんだけどなく傷つく」

「…そこかよ。はいはい、すまなかつたな」

「なんだかいよいよにあしらわれてる…」

クロエはなぜだかなれたような振る舞いでミケルのペースを外していた。彼はできる限りこの少女から情報を抜き取りたいらしい。しかしミケルはそれに付き合う気はないようだ。

「じゃ、いこうか。陛下がお待ちだよ。あと、いまさら逃げようと思わないこと。いいね？」

「…仕方ない。いこう」

ミケルはそういつて歩き出し、城門を目指す。クロエはミケルの小さな背中を見つめながら王城を目指した。

王の頼み

「どこに向かってるんだ？」

「陛下のいる部屋だよ」

クロエの前をミケルが短い一步を忙しく繰り返して進む。

「それにしてもやたらに長いな……」

「うん、私もそう思うよ。面倒だね。けどこの道を通らないと陛下の私室にはいけないようになってるんだ」

彼らは王城の門をくぐり、数多くの役所が受付を置くエントランスをぬけ、はたまた巨大な塔が天を貫く中庭を通り……と入り組んだ城内を進んでいた。クロエがふと声をあげる。

「……そういう魔法がかかってるってことか」

「あ、よくわかったね」

彼らはきらびやかな絵画や照明器具に彩られた廊下を進んでいた。そして突き当たる。そこは見覚えのある中庭の一角。塔に通ずる回廊だった。

「その通り！こういう仕掛け」

ミケルはそういつて廊下の突き当たりの大きな肖像画の額に手をかざす。すると絵へ向かっていくつかの光の筋が壁を伝って集まり始めていた。そして……

「あら不思議！壁があったはずなのに、その先は廊下でしたー」

そういつてうれしそうにくるくると回る。クロエはそれを冷めた目で見ていた。

「おい、俺さ、アナリアの魔眼持つてるから、はなから知ってたから、この魔法式の内容」

その言葉をうけてミケルはぴくりとはねる。

「はっ！魔法式ずっと見えてたの？じゃあ私がせつせとチェックポイントにいったことも？」

「バツチリ。決められた場所を決められた順番で訪れること、それで発動する空間に作用する魔法：だからやたらに遠回りだった、違うか？」

「うう：正解ですう：」

「：いっちゃ悪いがおまえ本当にあの天才なのか：俺の魔眼、そういうことができることぐらい知ってるだろ？」

「：知ってた。けど自慢したくて：ほら、すごくない？この年でこの魔法作ったんだよ。うん、私すごい」

「そこらへんはわからないが、楽しそうで何よりだ：」

「君はアナリア何かがあるから苦労しないよね。私の年で空間に作用する術式をくめる人なんてなかなかいないんだよ？」

「……」

快活なミケルにクロエは答えなかった。

「どうしたの、緊張してるの？」

「そんなところだよ」

「まあ、無理もないか。けど安心してね。いい人だからさ」
「だいいいな」

クロエには一つの仮説があった。もしそれが本当なら…間違いなく「いい人」などではない。

「じゃあいこうか。失礼しまーす」

ミケルが廊下の中でもひときわに存在感を放つ黒塗りの扉をひらいた。

「やあ、いらっしやいクロエ君。それとミケルお帰り」

扉の向こうには様々な古風な家具が並ぶシックな部屋であった。中央には書類が積載した机が一つ。そしてそこに一人、書類の山に埋もれている青年がいた。

「只今戻りました。この子がクロエ君です。魔眼も確認済みですよ」
「ど、どうも…」

「いやあ、こんな姿ですまないね。今そっちに…ああっ！書類の山が地滑りを！」

「あ、あーあ」

青年が立ち上がり、そして彼を埋めていた書類達が滑り始める。それをクロエは啞然としながらみていた。積み直すのはひどく骨が折れそうな量だ。このままでは…

「陛下！其はなゆた。流れる事象を破却せよ！」

しかしその書類は突如としてその動きを止める。停止した紙束は仄かに発光している。どうやら魔法的な作用が働いているようだ。

「……………」

「ありがとう。助かったよミケル。またスパイダに起こられてしまうところだった」

「いえいえ。おやすいご用です」

「えっと、それで俺は？」

青年とミケルは二人で話し始めてしまった。それをクロエの一言が引き止める。

「ごめんよ、クロエ君」

「陛下はこのところずっと徹夜だからですよ」

「そいつはお疲れさまだな…寝た方がいいぞ」

「うん…そうする」

クロエは冗談交じりにそういった。しかしそういわれた彼は部屋に備えられたソファに横に足を向ける。その足取りもどこかおぼつかない。そしてそのまま横になって寝てしまった。

「…おい、こりやどういう意味だ？」

「陛下はお疲れなの。それくらいわかってよ」

「ああ、悪かった…のか？」

「…今回ばかりは陛下もおふざけが過ぎるねよね」

その様子をみて二人はため息をつく。そしてミケルは軽く腕を振った。するとそれに呼応して紙束の輝きが消えうせる―すなわち紙

束の落下が再開した。ばさばさ…その軽い、しかし長い音に青年の意識は引き戻される。

「ああ！ミケル、なんてことを…」

「たまにはスパードさんに怒られてください」

「うう…」

「んで要件はなんだよ？」

クロエはこのままではまたこの男の挙動に振り回されてしまうと考えて、声を上げる。その態度は王に対するものとしてはひどく軽いものであったが、それを気にする青年ではなかったようだ。

「ごめんねクロエ君。そうそう、君を呼んだ理由を話そうか」

そういった青年はすっとソファから腰を上げる。その立ち姿は凛として美しかった。

「あ、まだ名乗っていなかったね僕はリベニア王国現国王、キレイという。どうぞよろしく」

「クロエだ…よろしく」

キレイが手を差し出す。それをクロエはおじることなく握り返す。しかしその表情は研ぎ澄まされていた。

「さてと…早速で悪いけど本題だ」

「今の茶番はなんだったんだよ、王様」

「君に緊張を解いてもらおうと思ってさ」

「…素じゃなくてよかったよ」

「でしょ？巷で噂の「英雄王」がこんなうつけなわけないじゃないか」

「…だよな」

「いいえ、あれが陛下の素ですよ」

「……………」

青年は軽く胸をそらす。

「まずはあれを見てもらおうかな、ミケル？」

「はい、お持ちください」

そういわれたミケルは何やら規則的に腕を振るう。すると彼女の足もとを中心に金色の陣が浮かび上がった。ミケルはなにやら細かく口を動かし続けている。それをクロエは魔眼でもって観察していた。

「空間転移？」

「そうそう。特別な倉庫にしまっているものを今持ってきてもらうと思うてさ」

その間にもミケルの周りの黄金は輝きを増す。幾何学的な文様が刻まれた円形の陣は徐々に縦方向にも浮かび上がり、回転を始める。

「まぶしいな、寝起きにはきついね…」

「……………」

最後にすさまじい発光を伴って、「空間転移」は発動し、その物体はミケルの目の前に現れた。それは…古びた、しかし何一つ傷のない、あきらかに異質な雰囲気放っている金属製の「鎧」だった。

「ッ……………」

「身覚えはあるかな…つい最近、君は一応「視た」はずなのだけれど？」

「おまえ…やっぱりそういうことかよ」

クロエにはこの鎧に見覚えがあった。最近の嫌悪感…その根源でもある、黒装束が身に着けていた鎧、それが彼の眼の前に存在していた。そしてそれは彼らを狙った刺客、その主人を明確に表していた。

「最初に謝っておくよ。君には悪いことをした…命が危ない可能性もあったからね。無関係な彼女を巻き込んでしまったのも申し訳ないことだね…謝ろう。ごめんなさい」

そういつてキレイ…刺客の主人は頭を深々と下げる。そして頭を下げたままにこういった。

「それで「先日の試験」でわかったよ。君は素晴らしい技術を持っている」

「………」

クロエは答えない。キレイはほほ笑み、クロエは笑わなかった。

「君の魔眼…これから起こる「予定」の戦争に一つ、古代遺物の有効利用のために、貸してくれないかな？」

彼はずっと頭を下げたままであった。しかしその表情はおそらく、支配者のそれであったことは、ほぼ間違いないことだろう。

王の頼み（後書き）

こんにちは。すこしおひさしぶりです。このお話冒頭のお城のちよつとしたしくみ、一応これもこの後使用することになりますので書いておきました。すこし、関係ない感じになってしまっていますね。次回、古代遺物についての「現時点」での説明が軽く入ります。よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0345y/>

遺物狩りのクロエ

2011年11月13日14時25分発行